高校生の国際競争！？
―― 世界の高校生のプレゼンテーションを見て ――

INFOE（海外子女教育情報センター） 代表
松本　輝彦

立命館高等学校主催の International Science Fair で、日本と世界の高校生の発表を聞く機会に恵まれました。その高校生の発表を聞いて、教育の国際競争の広がりと深化を、また、日本の子ども達へのスキル・トレーニングの必要性を感じました。と同時に、海外の子ども達の「宝」を再確認しました。今回は、その報告です。

International Student Science Fair（ISSF）

右のページを読んでください。

ここで紹介したように、「高校生に国際的な場で発表の機会を与える」のが ISSF の目的です。もちろん、高校生自身が自分のテーマ・題材について実験・観察・考察などを通して、知識や理解を深めることも、有能な研究者や技術者になるためには、必要で大切なことです。

それに加えて、このグローバル化・ボーダーレスの社会で、高校生がこれからより高度の知識や能力をを身につけていくには、別の考え方や視点を持った世界中の人々とのコミュニケーション能力の向上が不可欠です。科学のテーマについての、世界中からの高校生との英語でのコミュニケーションは、まさに高校生にとって理想的なコミュニケーション能力のトレーニングの場所です。

その意味で、この ISSF の目的は、大いに意義のあるものです。

Science Project Presentation

世界中から参加した高校生が、それぞれの学校で調査・研究してきた結果・成果を、Biology, Physics, Environment, Chemistry, Mathematics, Earth Science などの分野に分かれて、58 のプレゼンテーションがありました。

発表は、右下の写真にあるように、2人一組で、プロジェクターを用いての15分のプレゼントと5分の質疑応答です。プレゼン・質疑応答・司会も全て英語で行われます。

発表者にとって、プレゼンしているテーマのより深い理解が要求されるのは当然です。さらに、効果的なプレゼンには、言葉（英語）の運用能力と相手に主張を理解させるスキルが要求されます。英語がネイティブでない高校生にとっては、英語力と説得するスキルの両方のレベルを上げないと、せっかく素晴しい研究成果でも、聴衆には十分理解してもらえません。

私自身がいくつか聞いた発表で得た印象と、参加している高校生を指導してこられた先生方との話を通して、芸国の高校生に比較して見ると、平均的に日本の高校生の発表は明らかに、「説得のスキルが劣っている」という結論に達しました。研究のレベル派別として、英語力には極端な差は見られないがプレゼンテーションの仕方全体に、明らかにトレーニング不足が見られました。事前の練習の時間が多く取れるプレゼンの後の質疑応答の5分間の対応を見ていると、明らかにコミュニケーションのトレーニングが不足、いや、欠如しているとすら見えてしまいました。

意見交換をすることにより研究成果を上げていかなければならない、これからの研究者を育てるためには、説得するスキルのトレーニングが不可避である、と確信しました。

高校生のグローバルな競争？

参加者全員が、理数科に深い興味を持ち、調査や研究に目を向けている高校生です。30以上の参加国の高校生の中には、その国の期待を担って、10人以下の高校生に先生が一人という恵まれた環境でエリート教育を受けている参加者もいます。

「先端分野で能力を発揮できる」ためには、このエリート教育を受けている若者達と競い合う場面が必ず来ます。その時に日本の高校生達は、競い合う武器もスキルも持たないとしたら、どう対応が出来るのでしょうか?

高校生の世界でも、国際競争、グローバル・コンペティション、なんと呼ぼうと、世界の高校生の相手となって、あるいは同士になって、競い合う状況が来ています。

帰国子女の出番!

この日本の高校生が直面している世界は、異文化の中で苦しみ生き残ってきた体験を持ち、日本では得られない教育を受けてきた帰国子女の活躍の場となります。ただし、その活躍の場は、海外で身につけた「宝」を帰国後も更に伸ばす努力を続けた者のみに与えられるチャンスです。もちろん、海外にとどまった高校生にとっても、グローバルな社会であることには変わりはないので、同じ立場です。がんばってください。

立命館高校の皆さんに大きな拍手!!

参加人数が 600 人を超えるこのイベントを立命館高校の教職員と生徒が原動力となって開催しました。ひとつの高校の力で、この大規模なイベントを実質的に運営されているのに本当に驚きました。世界中からの参加者に変わり、立命館高校の皆さんの努力と献身（徹夜続きの準備!）に、心から拍手を送ります。

また、今回の訪問の機会を作りご案内いただいた、私の古い友人で、前立命館中学・高校校長の汐崎先生に心から感謝いたします。貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。